

風との出会い

蒲原智城〈2013年度実習生〉

私が東京演劇集団風と出会ったのは高校三年生の時、福岡県での『Touch ～孤独から愛へ』の一般公演を観劇した時でした。

当時私は、舞台俳優として生きていきたいと考えていたこともあり、『Touch』を観る前はメモ帳を片手に「プロの芝居を観て、何かひとつでも勉強しよう」という姿勢でした。ですが、物語が進んでいく中で、触れられる（Touch）ことで徐々に心を開いていく兄弟の姿や、触れる（Touch）ことで自分の思いを伝え、相手を感じ取ろうとするハロルドの姿が自分自身や親、兄弟のことと重なり、目の前で起こる様々な出来事が単なる虚構という枠を越え、自身の記憶や経験などが呼び起こされ、冷静に勉強をしようとしていた自分にはそこにはおらず、一文字もメモを取ることなく芝居に引き込まれて、とにかく号泣していました。

そしてカーテンコールでは、劇場という空間の中で誰かの存在や生まれてきたものを発見した時に「今ここで何が起こっているんだ」という不思議さや「私もこういう俳優になって人と出会いたい」という思いを持ったことを今でも鮮明に覚えています。高校生だった私はおそらく、カーテンコールの際に俳優が演技空間から素の状態への境界線を越えたその瞬間に、“俳優が観客と向き合う姿勢”を俳優から感じ、風へ入ろうと決心したんだと思います。

そして私は今、一年の実習期間と三年の研究期間を経て、風の劇団員として全国巡回公演やバリアフリー演劇、群馬県みなかみ町にあるアトリエでのゼミやワークショップなど様々な劇団活動を行っています。

劇団活動を続けていく中で私は、風の活動には人が存在している、と思います。

ひとつひとつの動きに試みを持ち続け、原点に立ち返り、これからも演劇を問い続けたい。